



サトウキビ産業のたそがれ

丹羽 典生 (にわ のりお)

本館研究戦略センター

フィジー人とインド人

フィジーのナンディ国際空港を出て、かつての調査地であったラウトカ方面のヤツメ村落に向かう。二〇〇七年一二月のことであった。二〇〇〇年の本格的な調査から何度目かの訪問となる。研究関心の変化に伴い古巣での滞在期間は減りつつあるが、フィジーに行くときには必ずかつて生活をともにした人びとの顔を拝みに行くことにしている。調査者の倫理とかいうおおげさなことではなく、むかしなじみに囲まれているのは過ごしやすいし、老人の消息を尋ね、子どもの成長を見るのはかけがえのない経験だからだ。

行くたびに目を引く変化は何も人間だけに起きているわけではない。周りのサトウキビ畑は叢となり、点在していたインド人サトウキビ農家の家屋のいくつかは、フィジー人に占拠されている。

背景には、地主として国土の八三パーセント以上の土地を所有するフィジー人、サトウキビ生産者として借地するインド人という植民地時代に培われた民族間関係が終焉を迎えたことがある。クータに代表される政治問題は、両民族の關係に水を差した土地のリース延長を阻害し、先進国との経済協定に依存してきたフィジーのサトウキビ産業の構造自体も危機的状況にある。定年後の収入をサトウキビに頼っているインド人の一人はいった。「サトウキビ産業

の現状は悪いとは言いたくない。とにかくできることをやっておくだけだ」。

土地を借りていたのは何もインド人だけではない。遠く離島カンダウから、ヤツメ村落に移り住み、サトウキビ生産農家に特化したフィジー人もいる。四世代にわたってその村落にいたため子どもも多くはこの村落の方言しか解さない。そんな彼らもサトウキビ畑のリース切れに伴い、見知らぬ出身地へ帰郷しつつあるのだ。老人の一人は、新年会の席でこっそり話しかけてきた。「おれは今年で七〇だが、こんなに生活が厳しいなんて、これまでなかったことだ」。



サトウキビをトラックに搬入中のフィジー人

サトウキビ刈りの合間のインド人



時代の終わり

しかし、フィジー人ことに農村部で生活している彼らはまだましな状況だともいえる。自分の土地でサトウキビ栽培をしている人も多く、仮にリース契約が切れたとしても、寝起きする場所だけならばなんとか確保できる。さらに厳しい現実には直面しなければならぬのは、フィジーで土地をもつことがむずかしい他民族、ことにサトウキビとともに育ってきたインド人であろう。

年が明けてヤツメ村落を離れ、最近調査を始めたナウソリ近郊に向かった。ここでは、リースが切れ、また都会での職を求めて、ヴァヌアアレヴ島から押し寄せている大量のインド人を目にした。たまたま知り合いになったインド人は語る。「このへんではフィジー人の畑の片隅に借地して大変だよ。借地料なんかフィジー人の言いなりだ」。

サトウキビ産業の再生に期待をかける人も多いが閉塞感はぬぐいきれない現状である。ひとつの産業の終焉は、ひとつの時代の終わりを象徴する。そこでは、これまでの関係が清算され、あらたな現実のなかでやりくりしていくよう人びとに迫る。ヤツメ村落を離れカンダウに向かったもう老年期に当たる知人の姿を思い返しつつ、彼のこれからの生活がよきものであることを願わずにはいられなかった。